



ピッポ新聞

2013

7

No.270

編集・発行 子どもの本専門店ピッポ&ピッポ古書クラブ
編集者 伊藤倭男

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

1

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

スイスへいつてきたよ (その7)

一ツの間違いで、予定を大幅変更

ゴルナグラーートの展望台(三〇八九メートル)からツエルマット(一六二〇メートル)までは、距離は少し長いが、その行程のほとんどが下り坂なので、アルプに咲く花や周りの山の景色をたのしみながらのんびり歩くつもりだ。このコースの途中を区切ってハイキングするツアーが多いようで、コースには日本人客があふれていた。

コースのポイントの一つは、リッフェルゼーという小さな湖に映る逆さまッターホルの姿だ。観光客が、ここでその逆さまッターホルンをカメラに収めようと群がっていた。ぼくもその中の一人だ。だが、残念なことに湖面は少し小波があり、マッターホルンがはつきりとは映らない。それに、マッターホルン自身も雲がかかって、その雲がなかなか消えないのでその全容を見ることができない。

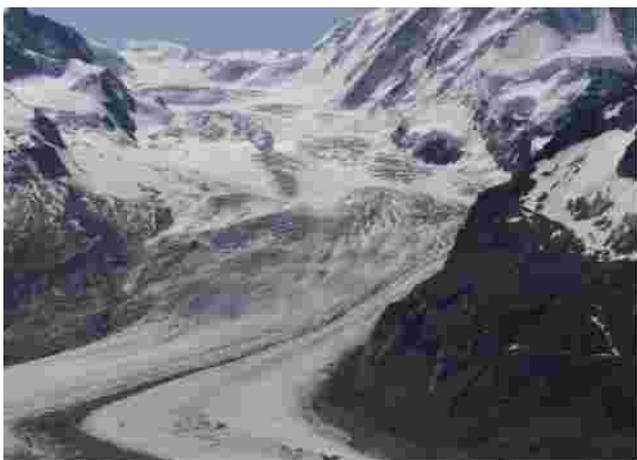
先を急ぐ必要がないので、しばらくとどまってマッターホルンの雲がとれるのを待ってみたが、状況はあまり変わらない。あきらめてハイキングコースに戻ろうと思った。

ハイキングのトレールは湖の右側についている。そこをツアー客がぞろぞろ歩いてゆく。しかし、先ほどからツアー客の何組かは左側

の高台から降りてくるので、たぶんこちらにもハイキングのルートがあるのだろう。そこからは高い岩山の裾を回り込んでいるようだ。ここでいつもの悪い癖が出て、余り人が行かない方を選んでしまったのだ。

高台に上り詰めてみると、そこはゴルナグラーート氷河を見下ろせる展望台になっていた。ここでぼくは大きな間違いを犯してしまったのだ。

道はこの氷河を見るためにつけられたもので、そこから先に進むハイキングコースらしきものはなかったのである。あるのは岩の斜面をたどっている細い踏み後だけだった。だが、ぼくは気軽に細い道に踏み込んでいった。この展望台から見たゴルナグラーート氷河の上部。



コースはずーと、左下に氷河を見ながら進める特別なコースだと思っただけである。これが正式なルートでないことは、後で考えてみれば間違いようがないことだったので

ある。

だいたい、スイスのハイキングコースには誰にでもわかる黄色い、大きな標識が要所ごとに立てられているのだ。これに従っていけば問題など起こりようがないのだ。

岩の間の細い道に踏み込んですぐに小さな手作りの標識があったが、あいにくそれは文字がかすんでいて、しかもドイツ語だったので読むこともできなかった。これをあまり気にもせず、先へ進んでしまった。

これが大きな判断ミスだったのである。道はさらに細くなっていく。さすがに「これは？」と、疑問に感じ始めたとき、悪いことに一〇メートル先を先行する二人の姿が見えてきたのだ。

ぼくは彼らに近づこうと斜め下にトラバースを開始した。五〇メートルほどに近づいたとき、彼らは歩いているのではなく、何かを準備しているようだった。よく見ると、この岩山の壁をロッククライミングするために支度をしていることがわかった。ここで初めて理解できたのである。このトレールは、ハイキングのためでなく、ロッククライミングをする人たちのための特別な道だったのだ。

気づいたところで、後の祭りである。自分の於かかれている状況はと言えば、角度のあり、かなり高度がある岩の斜面に立っているのだ。この岩の斜面は草木一本見あたらず、下にはゴルナグレート氷河が横たわるだけだ。

ここで自分の於かかれている状況がさらに悪

いことを認識した。自分がたどってきたはずの道が何処にもないのだった。ぼくはトレールを見失ってしまったのだ。これを見つけないことには、元に戻れない。

斜めに下ってきたのだから斜め上に戻れば見つけられるだろうと、斜めに登ってみたが道は見つからなくて、垂直に近い壁に行きついてしまった。付近を登ったり下りたりして探したが、どうしてもたどってきたトレールを見つけることができない。道さえ見つかれば、なんら問題もなく一〇分で展望台に戻れるのだ。

左のとがった岩山の側面で悪戦苦闘を強いられた。手前の草付きに戻ってようやくホットして、写真を撮る気分的余裕も生まれず。



苦闘が始まった。

こういう時には焦りは禁物だ。昔の渓流釣りでは、こんなことは日常茶飯事だったことを思い出して、落ち着くことにした。上がだめなら下、下がだめなら上というように落ち着いて探せばルートは見つかるものだ。

すると、岩が水で濡れたところに行き当たった。一見楽に越えられそうだが、こういうところが落とし穴なのだ。もし滑って滑落すれば一気に氷河に転落してしまふ。下の方はずつと水で濡れているので、ここは上を通過するしかない。岩が濡れていないところまで登っていつて、何とか越えられそうなるところを見つけた。高度感があったが、下を見ないことにして、無事通過。このあと悪戦苦闘は続いた。時には氷河のかなり近くまで下ったりしたのだ。四十五分ほど悪戦苦闘して岩場のトラバースをどうにかクリアし、草付きの斜面まで来た。後はこの斜面をトラバースするだけだ。しばらく行くと、はつきりしたトレールも見つかった。肝がちじみあがったが、やれやれだ。

ようやく元のリップフェルゼーに戻った。ここで昼飯を食べることにした。昨夜もツェルマットの日本食レストランへ行ったのだが、食べきれなかった天丼を、パックしてもらったのをザックに入れてきたので、これを食べた。天丼を食べたら一気に緊張感が解けたようだ。こつこつときは、米の飯に限るな！

リップフェルゼーには次々とツアー客が訪れてる。

先ほどより湖に映るマッターホルンの状態が良くなった。ぼくもこれをパチリ！このとき撮ったのが題字横の逆さマッターホルンだ。

この日の失敗が、ぼくその後のスケジュールを大幅に変えてしまった。情けないことに、ぼくはこの失敗で登山をヒビビってしまい、この翌日予定していた「カストール」も、グリーデルワルトで予定していた「メンヒ」登山もすべて「日和って」しまったのだ。

日本に帰ってきて、冷静にふりかえれば、予定していた登山はガイドと一緒に登るのだから、道迷いも、クレパスへ転落する恐れもないのだから、怖がることなど何もなかったのだけだね。

翌日は、カストール登山のかわりに、日本では考えていなかった、ロイカーバートという温泉へ出かけたのだった。

ツェルマットではハイキングを楽しみ、七泊したあと、グリーデルワルトに移動して、ここでもアイガー北壁の真下をたどるハイキングコースなど連日ハイキングメニュー登山も怖気づいて回避()を楽しんだ。

結局 持参した山道具は

一回しか使わなかった

七月二十一日(土)この日、いよいよチューリッヒへ戻る日だ。朝、グリーデルワルトの駅からファストバゲジでスツケースをチューリッヒへ送り出した後、ルツェルンへ立ち寄り、市内を見学して、夕方チューリッヒへ着いた。

チューリッヒの駅でスツケースを受け取り、ホテルに向かった。ホテルは最初に泊まったホテルと同じなので、今度は探し回る必要もなかった。フロントで予約してあるのですが「というところの親父たぶんオーナーだと思っが「オー、ミスターイトウ」と、向こうからぼくの名前を呼んできたので「イトース」と言っ、ホテルパウチャーを三つとしたり、「オーケー、オーケー」と言っ、パウチャーを見ようともしなかった。

部屋の鍵を貰っ、部屋に入るとなんだ！ダブルベッドがあり、結構広い部屋だった。最初の時は、部屋は狭く、バスタブもなくシャワーのみだったのが、バスもちゃんとするじゃないか。実は最初に泊まった時、フロントはアルバイトで、印象があまりよくなかったので、今回は少し気が重かったのである。今回の部屋を見た途端にそれは解消された。これで値段は最初のとくと変わらないのだった。

さて、ぼくはチューリッヒで、どうしても訪れたいところがあった。それは、レーンがクループスカヤとチューリッヒに亡命していた時、住んでいたというアパートを見たいのだ。

あらかじめネットでその場所を調べてきていたので、宿の親父にそれを聞いてみた。「ミニムストレーンの住んでいたところは、わかるか？」と、聞いたのだが、ぼくの片言英語が悪いのか、親父がレーンを知らないのか、あまり理解できなかつたようだ。ぼくには後者に思えたが、考えてみたら、住所がわかっているのだから最

初からそのメモを見せればよかつたのだ。

親父はその Spiegel Gasse 14 「シュピーゲル通り」¹⁴ というのをみせたらすぐパソコンで調べられて、市内観光パンフレットに行き方と大体の場所を記してくれた。

今朝はまずその場所を訪れてみることにした。パンフレットを見ながらリマト川の右岸沿いに湖の方角に歩き適当なところで路地に入った。ぼくは「こういう時の感が案外よくて、露地には通りの名前を記したした細長い表示が建物の壁などに表示されている。何回か路地をまがったりしていたら Spiegel Gasse」という表示を見つけた。それを曲がると道は少し上り坂になっていた。右手に小さな公園があり、その前の建物に「¹⁴」という表示があり、「一階の壁に「レーンの住まいであったこと」の看板がかかつていた。ただそれだけで、二階のその部屋が見学できるとかそういうものではなく、今もアパート()として人が住んでいるようだった。

ぼくの立っているこの石畳みの坂道をレーンもクループスカヤと一緒に歩いたのだらうな」と、勝手に思いをはせるしかなかつたのである。

「このチューリッヒではほかに行ってみたいところがいくつかあつたのだが、なんと今日は日曜日だということとそれらは休みだったのである。一番の繁華街だというバーンホフ通りを歩いてみた。なるほどきれいな店が並んでいるが、そのほとんどの商店が休みだった。少し歩くと、ペスタロッチの銅像が建っていた。ペスタロッチはスイ

ス出身だったことを思いだした。ここからチューリッヒ美術館へ向かうことにした。途中一回人に尋ねたが案外スムーズに美術館に着いた。

ものすごく広くておおきな美術館だ。ここは結構人が多かった。うろつろつろしていたら、美術館の人だろう男性が声をかけてくれた。「この美術館はとても広くていろいろのものを集めているが何を見たのか」と尋ねたので、おもにバロック美術から近代美術を見たいのだというところ、「じゃーその左側から行ってください」と教えてくれた。荷物は地下のロッカーへ預けてくださるともいい、さらに「作品の写真は自由に撮ってもかまいません」とも付け加えた。

ぼくは思うにこの美術館の人は日本へ来たことがあるのではないかと思った。そこで日本の美術館のほとんどが撮影禁止だということを知らず、スイスではそれが自由だと尋ねもしいのに教えてくれたのだと思った。もっとこの人にいろいろ聞いてみたかったのだが、英語がままならないので「ありがとうございます」と言うこととめたのだった。

さて、この翌日チューリッヒ空港から来た時とは逆のコースでオランダ経由で帰国したのであるが、スイスを出国するとき、何を疑われたのか、徹底的に調べられて、はだしにさせられて歩かされるといって屈辱を味わったのであるが、一年たった今は笑い話として話せる思い出の一つであるが、その時は腹が立って「バカヤロウ、フザケルナ」と日本語で小さな声で叫んだのだ

がもちろん審査官にはつじなかつただろうがそこでささやかな溜飲を下げたのである。

チューリッヒの街角風景



レニンの住んでいたアパート・その前の石畳み



ペスタロッチの銅像・リンデンホフからリマト川



チューリッヒの路地裏や狭い路地こんなところが好き



路地裏の古書店と世界中の紅茶を集めた店のウィンドー
残念ながら、日曜日で閉店だった

さて、今回でこのスイス記は終了。7月の下旬スイスを再訪し、新しくスイス記の続きを書きたいと思えます。拙文にお付き合いました。8月には店もリニューアルいたします。一ちらはご期待を！